

生産技術研究所について

8代所長 菊池 真一

今年には東京大学生産技術研究所の創立30周年に当たると聞いて、時の流れの早いのに驚いている一人である。

GHQ の指令で東京大学第二工学部が廃止になると聞いた時は失望の念を禁じ得なかった。第二工学部が発足して間もなく戦争が激烈になり、敗戦とともに一時消沈していたのが再び教育に研究に立ち直ろうとしていた時だけに、その気持は第二工学部の皆にあったと思う。

しかし瀬藤教授（初代、三代第二工学部長、初代研究所長）や井口第二工学部長などの必死の努力で、東京大学の中で生産技術研究所として残れることになったのはまことに幸いであった。幸いというのは当時第二工学部にいたわれわれのためばかりでなく、その後30年間の生産技術研究所の輝かしい業績を思うと、日本のために幸いであったと言いたい。

同じく東京大学の中に理工学研究所（後の宇宙航研と物性研の前身）があり、東京大学の中に理工学の二つの研究所のあるのは重複であろうと GHQ の指摘があったらしい。これに対しては、瀬藤先生は両研究所の目的をスペクトルにたとえ、生産研は理学からより工学への重点を持っていると教授総会で説明されたことを覚えている。しかし、学部から研究所への移行、とくに60講座から35講座への縮少の過程における移行は、決して小さい困難ではなかった。このために生研運営機構委員会がつくられ、30数回に亘る会議で綿密なつめを行った。そして最後は、瀬藤先生の責任において各部への定員割当を納得した。私は第4部の委員であったが、第4部は特に定員を削減されたので、皆不平であったが、けっきょく大局のために従うことになった。

つぎに大きな事は、生研が千葉から麻布へ移転する時で、大きな研究所が移るのであるからいろいろの問題があったが、これも移転委員会の周到な計画によってうまく行われた。ことに千葉で遠の人の通勤の問題、配置替えの問題は人がからんでいるために非常にデリケートであった。

私個人の事を申せば、第二工学部の時は応用電気化学、光化学の講座を担当していたが、研究所になるに当たって研究分野を狭めて応用光化学の研究に専心した。生産技術研究所は、各部間の共同研究には大変便利になっていて、お蔭様で愉快地に仕事をする事ができた。たとえば、電子写真の研究に当たっては、藤高教授（第3部）の適切なお指導によって研究が捗った。

生産技術研究所がさらに50周年に向けて発展されることを切望する。

